

# 日本の対中・対ソ外交

対談

三好 修  
(外交評論家)

中嶋 嶺雄  
(東京外国語大学助教授)

三好 最近日本外交は、中ソ紛争のう  
ずの中にすっぽりと巻き込まれてしまっ  
たような印象ですね。日中兩國政府間で  
友好条約交渉が進められる一方、ソ連の  
ほうはそれをけん制するかのようによソ  
善隣協力条約を締結しようじやないかと  
いう申し入れをしてきた。

最近中嶋さん、モスクワ、モンゴルと  
北京と旅行されましたが、そういう印象  
も含めて少し中ソ関係その他お話しくだ  
さいませんか。

中嶋 十二月の終わりから一月の中旬  
まで、ソ連、モンゴル、中国を同時に約  
一週間ずつ各国の首都を訪れて、中ソ対  
立のさなかの三方国を縦貫してみたんで  
すが、モスクワでの印象は、毛沢東なき  
あとの中国にソ連がいかに大きな期待を  
かけているかということをつくづく感じ  
て、モンゴルのほうへ今度入っていった  
わけです。そうしますと、モンゴルはこ  
承知のように、完全にソ連の影響下にあ

るわけで軍事的にもそうですし、今現在  
中国との関係が非常に悪いと。たまたま  
ウランベートルから北京まで三日間、国  
境地帯を汽車で来たわけでございますけ  
ども、モンゴル側はもう完全にソ連の軍  
事基地になっておりまして、これは至る  
ところにソ連の軍用車、あるいはソ連が  
進駐しているという状況がわかるわけでご  
ざいます。

ところが、中国側に入りますと、これ  
は意外なことに、中国側でいわばそうい  
う軍事的な緊張はほとんど感ずることが  
できずに、人民解放軍などのいわば隊列  
などもほとんどない。それから辺境にい  
ると言われる生産建設兵団というものも  
目撃することがなかったわけで、い  
ろいろ中国側にも尋ねてみましたが、ど  
うも中国側は、一、二年前の、ソ連の戦  
争に備えよという直接対峙の方針を変え  
たのではないかと。これはソ連が攻めてく  
るといいうわば軍事的脅威ということか

ら、もつとグローバルな対ソポリシーと  
申しましようか、対ソ戦略を最近の中国  
は考えているのではないかと気がし  
て、それは最近の全国人民代表大会でも  
ソ連はいわば東に声を上げて西を撃つと  
そういうようなことをやるんだという形  
で、明らかに国際戦略の中に中ソ関係を  
位置付けようという姿勢が見えるような  
気がいたします。

その一環としてまさにアジアの中で日  
本が重要な位置を占めてるだけに、日中  
日ソ間の条約交渉をめぐって、いくつが  
の外交攻勢がかかっているということだ  
はないかと思うんですね。それだけに、  
中ソが軍事的に対決するということ。こ  
れはたいへんなことですが、ある意味で  
は、むずかしい課題がアジアの国際政治  
の中に浮かび上がってきたという印象を  
受けて帰ってきたわけでございます。

それで、一月中旬くらいから、ソ連と  
中国の日本に対する外交攻勢が非常に激  
しい。一月の中旬に宮沢外務大臣がソ連  
を訪問し、保利茂議員が北京を訪問した  
ということもあるわけですが、少しこの  
間拾ってみますと、十六日には、陳楚大  
使が東郷外務次官を訪ねて、第二回目の  
日中予備交渉が始まっております。同じ  
日に、モスクワ放送は、北京を激しく批  
判して、これは全国人民代表大会という  
ものが憲法の中にも、いわば反ソ戦略と  
いうものを明記しただけに、ソ連を非常  
に刺激したと。こんなことがあって、ト

ヨノフスキー中日本大使が椎名副総裁に会  
うと。つまり日中友好条約を今結ぶこと  
は、ソ連を刺激するということをほのめ  
かすと同時に、いわゆる善隣友好条約的  
なものを非公式にこころもう打診してら  
わけてすね。

それからまた今度は、二月の四日陳楚  
大使が今度は日本に帰ってきたわけでこ  
ざいますが、このへんでまたソ連側が、  
「ブラウダー」のアレクサンドル論文を  
はじめ、激しい中国批判を行なうわけ  
です。

そういう経過のうちに、ブレジネフ親  
書を携えて、トヨノフスキー大使が三木  
さんに会うと。そこで先ほどの日ソ善隣  
友好条約を正式に提案したと。

さらに十四日から日中の第三、次予備交  
渉が東京始まり、そのときに中国側は  
国交樹立のときの日中共同声明ですね。  
その第七項目にあった派遣問題を、  
きり打ち出したと。そのほかには、  
タス通信のロモフ副社長が三木さんに会  
うとか、ポーランドの大使が官房長官に  
会うとか、いろいろ動きがあり、一方ト  
ヨノフスキー大使も河野参議院議長に会  
ったり、三月二十日には今度、陳楚大使  
が激しいわけをして。こういう激しい動  
きの中で今日日本の政界は中ソ攻勢、中ソ  
対立の波に洗われようとしているんでは  
ないかという気がいたします。

三好 欧米の新聞も、最近はこの成り



いくつかまだ実務協定が残っているわけですが。にもかかわらず、中国がこのところ非常に友好条約の締結に熱心である。そこにやっばり中国のいわば大きな世界戦略が一方にあるわけですね。

それを見抜いているソ連としては日中間へのブレーキをかけると、そしてできれば領土問題なんというむずかしい問題をたな上げたいと、そしてまたさらにできれば、ソ連がねらっているところのアジア集団安保構想の中に組み込もうと。まさに中ソ双方とも、互いの世界戦略の一環の中に日本を取り込もうというふうな姿勢が見えるわけで、これはやはりわれわれとしても、よっぽど慎重に問題を考えていかないと、条約はやっばり国家百年の大計にも関係するわけですから、非常に多面的な考慮を要するんじゃないかという気がするんです。

**三好** だから、極端の場合を考えてみますと、このままでいけば、どうも日中友好条約は派遣条項の扱いてもつれるかもしれませんが、その問題さえなければ早期調印批准ということになりかねない。しかし一方日ソ善隣友好条約のほうは、これは先ほど言いましたソ連の高官は、これは何も日本では善隣条約を結んだら、平和条約交渉に有害だという意見があるが、そんなことはない。その善隣友好協力条約の中に、この善隣条約は「両国間の懸案の問題を解決して、平和条約を結ぶ」という両国政府間の合意事項を

何ら阻害するものでないということをしてわっておけばいいじゃないかと、こういうふうには言っているわけですね。

一応もつとまではいいませんが、これはいつか三木外務大臣が、一九六七年に訪ソしたときに、コスギン首相が言いつけた例の中間措置に当たると。だからまず善隣条約、それからその平和条約と、こういうコースで考えた方がいいんじゃないかというんです。しかしここにやっばり外交的には大きな落とし穴があると思わなくては、というのは、三木首相それから宮沢外務大臣もはっきりとそれを拒否されたときに理由として出されたように、平和条約は戦後処理の問題だと。その戦後処理の問題、つまり領土問題、国境の問題も解決しないのに、それに続くべき善隣条約を結ぶということ、それ順序が違わんじやないかと。この順序がさかさまになるということはたいへん重要だと思わなくては。

もう一つ、善隣協力条約の危険性は、中国側にとっては、これはやはりソ連の言う「アジア集団安保構想の一角」としてソ連はインドやベンガラライシユと同じような友好条約を結んでおる。今度は日本と結べば、東北アジアから東南アジア、それから南アジアにかけての三日月型の中国包囲体制の骨組みができるんだと。やっばり中国側としては、最もこれには強硬な反応を示してくるんじゃないかと思わなくては。そういう意味では

日ソ善隣友好条約は受けにくいと思うわけですね。しかし、日中友好条約が調印、批准されて、それが提起している善隣協力条約というものの交渉について日本側があくまでこれを拒否するということだ、何が起るか。ぼくは最悪の場合を考えてみるんですが、ソ連側はひょっとしたら、北方領土問題、平和条約の外交交渉をもう一度中断するという措置が出てくるんじゃないかと。こういうことは起らないかもしれませんが、起るとした場合はどうするかという事は、今から政府も、国民も真剣に考えでおかなくては

いけないんじゃないか。  
**中嶋** そうですね。これまでの日本の対中、対ソ外交を見てみますと、どうも相手方が非常に意味では、戦略的に日本に對比してくるのに対して日本側はいわば戦略的な対応ができずに自らの外交的な選択の幅をせばめてしまつたような気がいたしますね。ですから、その今十分気を付けて主体性を持っていく、日本の方策にとつても非常に大きな問題になるわけで、最近の一連の外交攻勢を見ても、むしろ日本を共通の底辺として、中国のほうは、中国、日本、アメリカといふ三角形をソ連が、日本、アメリカ、ソ連のほうはソ連、日本、アメリカといふ三角形をソ連で考えたるようには気がいたしますね。

日本は何かとんとんとと外見的な対応をしない、今なぜこういういわば平和友好条約はある意味での抽象的な条約の問題をなぜ中ソがこらほど固執するのかということを考えてみる必要があると思わなくては。

たしますので、このへん、あまりホットな対応をしない、今なぜこういういわば平和友好条約はある意味での抽象的な条約の問題をなぜ中ソがこらほど固執するのかということを考えてみる必要があると思わなくては。

**三好** その意味では、今度の日中懸案は無は全く日本は龍汗を流した。七月九日の日中共同声明の中で、日中平和友好条約の交渉をしようといふ、あのソ連とソ連としてなかつた、この問題をどうにかかつてすね。ソ連はこれにわかかわらさず、北方領土の問題をいかに解決させたかもしりませんが、少なくとも、それなりに口実を得て、しかも、その

はアメリカなどの非常に国際戦略的な考慮をもつて動いていくぞ、という大きな動きの勇躍にあるところを、思わぬ、思図見抜く動かない、こんなげめにいふことを

